

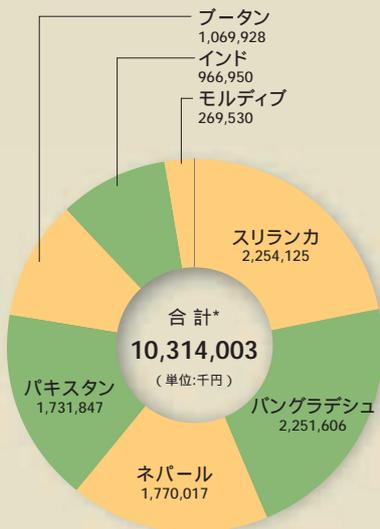
南西アジア

Southwest Asia



援助の柱 「貧困削減」への協力を最重視

各国への協力実績（2004年度）



*グラフ掲載国の実績合計額

南西アジア地域には、全世界の貧困人口の約40%が暮らしています。教育、保健などをみても、ほかの貧困地域と比べて開発が遅れており、ジェンダー格差が依然として存在するなど、解決すべき課題を多く抱えています。

こうした南西アジア地域では、「人間の安全保障」の視点を取り入れて、「貧困削減」への協力を最重点に掲げて取り組んでいます。具体的には、基礎生活の向上(保健・人口、教育、安全な水)と経済の安定成長(農業・農村の開発、中小企業の振興と投資の促進、経済基盤の整備)の両面からアプローチします。また、ガバナンスの改善、都市化や工業化が引き起こす環境問題への対策、ジェン

ダー格差は正についても協力していきます。

スリランカを中心に、平和構築への支援にも引き続き取り組みます。また、2004年12月に発生したスマトラ沖大地震・インド洋津波の被害に対しても、スリランカ、モルディブで再開発・防災などの中長期的な支援を継続していきます。



JICAで作成した教科書を使って識字教育を受ける女性たち(ネパール) 撮影: 浜田一男

開発の現況

貧困層の削減に向けて

南西アジア地域は、バングラデシュ、ブータン、インド、モルディブ、ネパール、パキスタン、スリランカの7カ国を含みます。この地域には約13億人が住んでいますが、このうち、貧困人口は4億人を超えています。この地域では、さまざまな要素(民族、宗教、言語、気候など)が政治や社会と複雑に関係しており、社会や文化の多様性や奥深さにつながると同時に、社会の不安定要因ともなっています。各国は貧困削減をめざして開発政策を進めており、教育、保健などの面で改善してはいますが、開発は依然として遅れています。

南西アジア諸国の経済成長率は、ここ数年は一部を除いておおむね5%前後で推移しており、比較的好調です。しかし、多くの国が衣料品、農産物など特定産

品に輸出を依存しており、経済構造は脆弱で、貿易収支、財政収支は恒常的に赤字になっています。パキスタンとインドの緊張関係が少しずつ緩和されていることを背景に、今後は南アジア自由貿易圏の設立をめざすなど、域内各国の経済活動が活発になり、地域の安定化に寄与することが大いに期待されています。



電話網の整備拡充工事を行うJICA専門家とブータン通信公社職員

重点課題と取り組み

ガバナンス改善支援

近年、この地域でも民主化の流れが加速しており、行政分野に関しても、中央集権から地方分権への移行が進みつつあります。

JICAでは、地方行政のキャパシティ・ビルディングをめざし、パキスタンとブータンで住民参加型の「地方分権化支援プログラム」を実施しています。バングラデシュでも、地方行政機関と地域住民とを結んで、住民の意向が開発に反映される仕組みづくりを支援しています。

既存の教育制度が財政を圧迫するとともに、教育の質の低下が懸念されているスリランカでは、「教育改革支援プログラム」を通して、教育行政システムの再構築をめざしています。同じくスリランカの「保健医療行政支援プログラム」では、保健医療の政策を転換させ、効率的な治療システムへの進化を進めて、貧困削減に配慮した保健医療サービスを充実させる協力を実施しています。また、パキスタンでは、「警察改革プログラム」を実施して、新警察法をもとにした、警察行政の地方分権化をはじめとする抜本的な改革を進め、公平で公正な刑事司法体制の導入をめざしています。

今後は、これらのガバナンス改善支援をさらに進めるとともに、支援を通して得られたノウハウや教訓などを共有し、今後、ガバナンス支援案件を実施する際に生かせるよう検討していく方針です。

「人間の安全保障」の視点

膨大な貧困層を抱える南西アジア地域では、貧困対策を共通の重点課題として掲げ、「人間の安全保障」の視点を積極的に取り入れて事業を形成し、展開しています。

具体的には、基礎的な生活の条件を確保することがむずかしい人々や地域に直接届く支援を行います(安全な水の確保や保健など)。スリランカでは基礎インフラの復旧と住民組織のエンパワーメントを中心とした「コミュニティ・アプローチによるマナー県復旧・復興計画」、バングラデシュではポリオ、フィラリアを対象とした「感染症対策プログラム」、インドでは貧困地域を対象に「安全な水供給支援」、パキスタンとネパールでは結核対策やEPI(予防接種拡大計画)/ポリオ対策を支援しています。

また、貧困層は自然災害や環境汚染に対しても脆弱な側面をもっています。バングラデシュで「砒素汚染

Front Line インド 女性自助グループ支援

産直運動を振興し、女性の自立を助ける

「自分の力で生きていく」ために

岐阜県に本部を置くNPOソムニードは、JICA草の根技術協力事業で、2004年7月から、インドのアンドラ・プラデシュ州ビジャカパトナムで女性の自立支援事業を実施しています。都市でも農村でも、貧困生活のなかで最もわ寄せを受けるのは女性です。この事業は、これらの女性たちを「助ける」のではなく、リーダーを育て「生産者と消費者のネットワークによる産直運動」「生産・物流センターの管理・運営」といった具体的な活動を通して、女性たちが自分の力で生きていくことを考えられるようにするのが目標です。

1年目は「いままでの活動が、自分の力で生きていけるようにすることに役立ったか」「なぜ女性自助グループが必要なのか」を考えてもらうための研修や視察を行いました。

主体性をもたせ、力を引き出す

初めは、どのグループもNGOや政府から援助を受けられればよいとしか考えていませんでした。都市や農村のスラムで暮らす女性たちは、どんなことでも自分が決めて実行することはできないと思っていたのです。この事業では、彼女たちに「自分で考えてごらん、誰のグループなの?」とたえず問いかけます。会計帳簿づけもグループの規則づくりも、すべて女性たちに主体的に行ってもらうことで、グループの可能性を見だし、彼女たちも気づかなかった力を最大限に引き出すのが、この事業の特徴です。

現在、生産・物流センターの管理・運営委員会

の委員が選ばれ、彼女たちは「これは私たちの事業だ」「私たちはJICAやソムニードのパートナーだ」「自分たちがセンターを運営していかなければ」と言うようになりました。そして、毎月2回の委員会を開き、いままで不定期だった各グループの会議も定期的開催するようになっていきます。

(インド事務所)



質に応答にも積極的に参加するようになった女性たち

対策プログラム（P.16～17参照）パキスタン、バングラデシュで「洪水対策」、インドでは「ガンジス川汚染対策流域管理計画調査」を支援しています。特にバングラデシュでは、中央・地方政府と地域住民の双方にアプローチし、NGOと連携したり、無償資金協力と技術協力などさまざまなスキームを連携させたりして、より大きなインパクトを与える支援をめざしていきます。

平和構築支援、津波復興支援

スリランカでは、過去20年間の武力紛争によって多くの人命が失われ、国内避難民や数多くの難民が発生しました。しかし、2002年2月には無期限停戦合意に至り、「スリランカ復興開発に関する東京会議」が開催され、スリランカの「平和の定着」に向けた支援に対し、国際社会が一致した力強い決意を示しました。JICAは、「平和の定着」を積極的に支援するために、全スリランカ国民が平和な生活をあまねく手に入れ、そのことによって平和の達成が後押しされるよう、地域・民族のバランスに十分に配慮しながら、協力を進めています。また、ネパールについても、平和構築関連の案件形成を慎重に継続していきます。

2004年12月のスマトラ沖大地震・インド洋津波では、スリランカ沿岸部とモルディブに甚大な被害が発生しました。JICAは支援の初期段階から、「緊急人道援助などの短期的対応」から「復興後の再開発・防災などの中長期的支援」までのスムーズな移行を念頭に置いた協力を開始しており、今後も継続していきます（P.11～12参照）。

また、スリランカでは、津波災害で被害を受けた地域の多くが紛争の影響を受けた地域でもあるため、平和構築の視点を取り入れつつ、津波災害に対する復興支援を進めていきます。



武力紛争による難民・国内避難民の再定住を支援（スリランカ・北東部トリンコモリーの難民キャンプ）

Front Line スリランカ 南部津波被災者支援活動

被災地の人々に笑顔が戻った

1カ月にわたり避難所を支援

インド洋津波の被害を受けたスリランカに、3月上旬から約1カ月間、19人の青年海外協力隊員チームが派遣され、コロンボから160km南のマータラ県にある19カ所の避難所で支援活動を行いました。マータラ県では1087人が死亡、2万9550人が避難所生活を余儀なくされています（被災者人数は2005年4月現在）。隊員は、被災者の感じているストレスや恐怖感を和らげるために、手工芸教室（陶芸や民芸品の作成など）、レクリエーション（紙芝居、折り紙、人形劇、フォークダンス、ボーリングなど）、スポーツ（サッカー、バレーボールなど）を企画しました。派遣期間の最後には、踊りの出し物、南部地方の伝統文化である悪魔払いを企画して、避難所住民と一緒に楽しみました。子どもから大

人まで歌や踊り、スポーツに興じ、特にチーム分けをしてゲームをすると、他人の声が聞こえなくなるほどの大歓声がありました。

活動を終えてキャンプから帰ろうとすると、ほとんどのところで「今度はいつ来るの？」「また来てね」と声をかけられました。隊員はその声を聞くたびに、この活動の意義を強く感じました。

被災者の多くの笑顔と出会う

被災者の多くは、家族や知人、財産などをなくした悲しみに加え、住宅再建や就職にも見通しが立たず、不安のなかで生活しています。今回の活動は、被災者が気分転換

するいいきっかけになったと思われる。今回派遣された隊員は、全員、スリランカでの隊員経験があり、現地語であるシンハラ語が話せました。そのため被災者との距離もすぐに縮まり、多くの笑顔と出会うことができました。

（スリランカ事務所）



子どもたちも一緒にフォークダンス、つかの間の笑顔が戻った